

幼稚園実習における音楽表現活動に関する学生の学び

櫻井琴音・野口美乃里・坂井加奈

(佐賀短期大学 幼児保育学科)

(平成21年2月4日受理)

Learning through Teaching Practice on the Activity of Musical Expression

Kotone SAKURAI, Minori NOGUCHI, Kana SAKAI

(*Department of Early Childhood Education and Care, Saga junior College*)

(Accepted February 4, 2009)

Abstract

We made a research at the students on the activity of musical expression in the field of nursery educations. It is very important for kindergarten teachers and childcarers to get not only ability of singing and performance but also practice ability of child care and communication with children. From the result of this research, we made the consideration about what the students should learn and their problems in the teaching practice. We have to understand experience of music activity and ability of the students to develop our lectures.

Key Words: Teaching practice in the kindergarten 幼稚園実習
Music activity 音楽活動

I. はじめに

保育者養成校で学ぶ学生たちにとって教育実習とは、授業などで得た知識・技術と保育現場での実践を結ぶ最初の機会であり、目の前の子どもたちと語り合い、共に活動することによって日頃培った学びをより深めることのできる場であるといえる。なかでも音楽表現活動は、子どもの自由な発想を認め、協調性や感性を育むことができる機会として重要な活動のひとつであるといえる。しかし、学生によっては音楽表現活動を「扱いがたい活動」として捉えており、実習中の実践でも敬遠することもある。なぜなら、音楽表現活動の実践は歌唱、楽器演奏等の技術を伴うものであるが、単に自分が習得した技術だけを現場に持ち込んでも、子どもの学びに直結しがたいからである。

音楽活動は手段であり、子ども達の人間的な成長を目的として音楽表現活動を行うのであれば、保育者には豊かな音楽表現力はもちろんのこと、音楽を媒介に子どもと交流する技術等を身につけておくことも必要となる。学生たちは、保育者養成校在学中に習得しなければならない音楽の知識や技術に目が向きがちだが、現場で求められる音楽表現活動実践力とはいかなるものかについて考えさせることも重要である。

我々音楽担当教員は、保育現場の子ども達と学生の双方を結びつける立場にあるため、教員自身も現場の実情、保育実践力等を把握しておくことが必要となる。現場での即戦力を持った保育者養成を目指すには、個々の学生の音楽経験や力量を把握し、それを考慮した授業内容と展開をしていくことが望まれる。

II. 目的

本学の音楽関連科目の授業内容の充実、及び音楽担当教員間の指導上の連携強化を図る上での参考資料とする目的で、幼稚園実習における音楽活動に関するアンケート調査を実施した。本稿ではその集計結果を報告し、現場において様々な音楽活動を体験することを通して、学生が何を学び、何を今後の課題と捉えたのかを明らかにし、授業内容と指導の改善に活かしたい。

III. 調査概要

1. 方法：学外での幼稚園実習開始1週間前に『幼稚園実習における音楽活動に関するアンケート』の調査用紙を配布し、記入についての説明を行った。調査項目中(1)については実習前に記入させた。また、2週間の

学外幼稚園実習終了後に調査項目(2)～(4)を記入させ提出を求めた。

2. 調査項目：音楽活動に関する調査内容は下記の4項目で、回答は全て自由記述とした。また、今回の調査では、各項目とも音楽に限定して回答するよう指示した。

- ① 今、学外実習を通して知りたいと思っていることは何ですか。
- ② 実習中に体験したこと、学んだことは何ですか。
- ③ 実習中に難しかったことは何ですか。
- ④ 今後のあなたの課題は何ですか。

3. 実施時期：2008年6月

4. 対象：佐賀短期大学幼児保育学科2年次生 110名

5. 回収率：50%

IV. 研究結果及び考察

アンケートの結果と考察は、以下の通りである。なお、今回のアンケートは自由記述で行ったため、複数回答や内容には重複部分があった。また、学生の記述を項目ごとに拾い上げ集計を行ったため、調査対象人数と合計が異なっている。

1. 今、学外実習を通して、知りたいと思っていることは何ですか

学生の回答の上位3位を以下に示す。

- ① 園での使用曲や使い方についての記述〔33名〕
 - ・どのような場面でどのような曲を弾いているのか。
 - ・季節の歌は何を歌っているのか、歌はどれくらい歌っているのか。
 - ・どんな幼児曲や教材（タンバリン・カスタネットなど）を使っているのか。
 - ・何歳児が何を歌っているのか。
 - ・生活のどこで、どれくらい音楽を使っているのか。
 - ・ピアノ以外での音楽活動をどのようにするのか。
- ② 指導法についての記述〔23名〕
 - ・手遊びの仕方（注目させる方法）
 - ・ピアノ演奏中に止まってしまった時の対処法。
 - ・音楽を使った单元保育のやり方。
 - ・子どもが知らない曲をどう指導するか。
 - ・リトミック指導法。
 - ・文字の読めない3歳児への歌の指導法。
 - ・キリスト教保育にはどのような歌があるのか、子どもたちに理解させるための言葉掛け。
- ③ 子どもの音楽への興味・関心についての記述〔10名〕
 - ・子どもたちは音楽についてどう思っているのか。

- ・子どもたちはどんな曲が好きなのか。
- ・子どもの音楽に対する興味。

入学時点では、幼児保育学科学生の約半数が音楽初心者である。1年次に経験する附属幼稚園での学内実習では、参加実習での歌唱のピアノ伴奏はほぼ全員が経験するものの、独自のテーマを設定し行う単元保育では、音楽活動は難しいものとし敬遠する傾向がある。実際、1年次後期に実施された学内実習に於いて、単元保育のテーマに音楽活動を選択した学生は120名中15名（12.5%）であった。しかしこのアンケート調査を行った時点では、学内実習二回（1年前・後期）、学外保育所実習（1年次2月）と経験を重ね、子どもが活動する時に、いわゆる音楽活動以外の場面でも、そこには自然に音楽が寄り添い、重要な働きをしていることを経験的に認識し始めているのであろう。学生の記述からは、自らも音楽を使い子どもと関わりたいという意欲が見て取れる。そして、その為に知っておきたいこととして「どの発達段階の、どんな場面で、どのような曲を、どのように使うのか」や具体的な指導法についての記述が多く見られた。

2. 学外幼稚園実習中に体験したこと・学んだことは何ですか

学生の回答の上位3位を以下に示す。

① 保育者の援助・指導についての記述〔49名〕

【歌唱に関して】

- ・ただ歌を歌うだけでなく、保育者が実際に身体を動かしたり踊ったりすることで、子ども達にとって親しみが持てるように楽しい雰囲気を作ること。
- ・季節に合った歌を歌う。
- ・子どもの歌いたい歌を歌う。
- ・子どもの歌うペースに合わせて、ピアノをゆっくり弾いたり早く弾いたりしなくてはならない。
- ・クレヨンを使う時に「どんな色が好き」を歌ったり、何か製作をする時はそれに沿った歌を歌う。ご飯の前にも「お弁当の歌」を歌ったりして興味を持たせる。
- ・一つの歌でも様々なパターンで歌っていた。
- ・カエルの歌で、高い声で歌ったり、低い所はゾウさんが通っているように歌ったりして楽しんでいた。
- ・知らない曲を教える時、リズムを取り、区切りながら教えたり、先に歌ってみせたりしていた。
- ・歌を歌うとき、難しい部分などは抜き出して教えていた。
- ・一日の中でも朝から降園の時間までたくさんの歌や手遊びがあった。季節に関する歌（カタツムリなど）や行事に関する歌がたくさん取り入れてあった。
- ・歌は子ども達を集中させることができる。

【楽器活動に関して】

- ・運動会（10月）に向けてのマーチングの練習を見ることができた。シンバルや太鼓等の打楽器の楽譜は「シャン」「カン」「コン」などの言葉で書かれて、先生方の工夫を学ぶことができた。太鼓のお稽古でバチの握り方や指の体操など太鼓を上手に打つための練習をしていた。姿勢や挨拶も普段と違うものだったので子ども達が集中していた。
- ・メロディオンの練習…絵譜を使う、メロディオンはおもちゃじゃない（楽器を大切にすること）、基本を大切に（手の形、姿勢、タンギング）。
- ・年長の鼓隊の練習…言葉（簡単な文章）でタイミングよく教えていた。メリハリをつけて（すごく厳しく、でも最後はほめる）。

② 実際の子どもの姿が観察できた〔16名〕

- ・メロディオンなどを使って活動していた。年長は運動会に向けての鼓笛隊の練習を行っていた。
- ・歌を教える時はまず、手遊びをしながら歌い、子ども達の興味をひく。手遊びをしながら歌うと子ども達も楽しんできた。自分が楽しそうに歌わないと、子ども達も楽しんでくれない。
- ・ピアノの活動があり、教えることの難しさが分かった。
- ・3歳児はたくさん誉め、自信をつけてあげることが大事だということが分かった。
- ・子ども達は歌ったり踊ったりすることが大好き。
- ・初めてする歌や踊りでも、一生懸命に私の真似をしようとする姿が健気で可愛かった。

③ 様々な音楽活動を知った〔7名〕

- ・立ったり座ったりするにしても、ピアノを弾き子ども達を促していた。音研の日といって、子ども達の耳を鍛えるためにベルを使って音階やゲームをしていた。音楽が苦手な子どももゲーム感覚ですれば楽しめる。
- ・音楽や歌に合わせてオベレッタごっこをする。
- ・お始まりの歌で、2人ペアになって歌う、踊る。（リトミックみたいな感じ）
- ・音程を変えたりして表現させる。例えば、「カエルの歌」などで、低い音でお父さんをやってみたりして、それに合わせて歌ってみたり動いたりする。また速さも変えた。

学生は保育者の援助・指導に高い関心を示し、つぶさに観察してきたことがわかる。

前項の「実習前に知りたいこと」の記述と比較し、非常に具体的かつ詳細な記述からは、保育現場での実際の指導や、子どもと保育者の関わりを間近で見ることにより、自分を保育者に置き換えながら、短大の授業で習得したことを実際の保育で展開するための子どもへの言葉

掛けや工夫、指導のポイント等を吸収し、自分のものにしたいという意欲が感じ取れる。また、日常保育の中で音楽を効果的に使うことで、子どもの意欲や集中力を引き出し、保育に流れを生み、スムーズにすることへの気付きや歌唱、楽器活動だけではない音楽を用いた模倣表現や即時反応、リトミック等の表現活動に出会い、刺激を受け、学生自身が音楽の楽しさを再認識し、音楽が子どもにもたらす物の大きさを感じている様子も窺える。

3. 実習中にあなたが難しいと思ったことは何ですか

学生の回答の上位3位を以下に示す。

① ピアノの技術に関する記述〔30名〕

- ・歌いながら、子ども達を見てピアノを弾くこと。
- ・エレクトーンを使って、リズムに合わせて弾くこと。
- ・間違えずに弾くこと、歌う人の人数が増えるほど緊張して失敗した。
- ・一緒に楽しく歌おうと思っても、ピアノの練習不足で間違っしまい子どもたちに迷惑をかけた。
- ・子どもたちのペースに合わせてピアノを弾き、子どもが楽しめるようにテンポをゆっくりにしたり速く弾いたりすること。

② 指導法に関する記述〔28名〕

- ・新しい歌を教えたとき、メロディーは簡単だったので子どもたちもすぐに覚えて、口ずさんでいたが、歌詞を覚えてもらうのが難しかった。ペープサートを使ってお話したり、私自身が大きな声で歌ってみたりした。
- ・ピアノカの活動があり教えることの難しさが分かった。

③ その他の記述〔1名〕

- ・障がいを持つ子どもへの言葉のかけ方や援助の仕方がとまどいもあり難しかった。みんなと同じことをすぐ出来るというわけではなかったので単元の時はどのような言葉かけをしたら興味を持って取り組んでくれるだろうと考えた。しかし実際に私が思っていた以上に、周りの子ども達は普通に接しており、移動の時や活動や活動する時は「〇〇ちゃん行くよ」と手を引いて一緒に活動する様子が見られて、嬉しい気持ちになった。単元で色ぬりをする時、歌を口ずさんでみると、その子は興味をこっちにむけてくれた。

この項目では「ピアノの技術」に関する記述が圧倒的多数を占めた。ピアノをはじめとする保育技術に関しては、授業で学んだ技術・知識だけでは、実際の保育の場に対応するのは難しいのが現実である。それは自らが実際に保育を行う中で習得されていくものであろう。2年次に履修するピアノⅡの授業は、弾き歌いを主要内容とし、特に学外幼稚園実習までの2ヶ月間は、6月の実習で使いやすい季節の曲を課題としている。

また実習先からあらかじめ渡された曲の指導も行い実習に備えている。しかしその時点では「正確に」「間違えずに」「止まらずに」弾くことが学生の目標であり、よしんば、そこに子どもの姿をイメージし、子どもに合わせて弾きたい気持ちを持っていたとしても、実習先で実際に子ども達を前にピアノを弾く時に、楽譜や鍵盤ではなく子ども達一人ひとりの顔を見ながら、子ども達のその時の状況（曲の習得具合等）・状態によってテンポや表情を様々に変化させ、余裕を持って弾けることが求められることを、実習で実感することになる。これについては一朝一夕に出来るものではなく、実践を繰り返しながら、場数を踏み、慣れることで解決されることを理解させることが大切である。

4. 今後のあなたの課題は何ですか

学生の回答の上位4位を以下に示す。

① ピアノ技術の向上に関する記述〔39名〕

- ・子どもたちの前に立つと緊張し、焦っしまい子どもたちにそれが伝わってしまうので、自信を持てるようピアノの授業の時から意識しながら取り組みたい。
 - ・ピアノを弾きながら大きな声で歌う。
 - ・季節の歌を弾けるようにする。
 - ・子どもたちの様子を見ながらピアノを弾けるようにする。
 - ・ピアノを間違えても、止まらない技術をつける。
 - ・暗譜し、鍵盤を見ずに弾けるようになること。
- #### ② 教材研究に関する記述〔12名〕
- ・もっとたくさんの幼児曲を知る。
 - ・弾ける曲のレパートリーを増やし、色々な場面できに弾けるようにすること。
 - ・季節の歌、マーチ、お眠りの歌等のレパートリーを増やす。
 - ・リトミックの時、バリエーションを豊かにする（ゾウさんの足音、ねずみの足音など）
 - ・一つの歌でも弾き方で様々な表現をすること。

③ 援助・指導法に関する記述〔11名〕

- ・どのようにすれば子ども達が楽しく、興味を持ち活動するのかを考え、言葉掛けや配慮をする。
- ・年齢（発達）に応じた活動を出来るようにする。

④ 自分自身に必要なと思った要素〔5名〕

- ・学外幼稚園の保育者のように、表現力を豊かにしたい。
- ・活動と活動の間を空けないよう、次の活動に移せるような頭の回転の速さが必要だと思った。
- ・自分自身が楽しんで音楽活動すること。
- ・現場に在ることをイメージして練習する。

今後の課題として、やはりここでもピアノの技術に関

する記述が一番多い。ピアノの経験が浅く、ようやくバイエルが終了した程度の学生にとっては、実習でピアノを弾くこと自体に不安を覚えているのだから、当然であるともいえる。その上、その他の保育技術や、保育内容と比べ「できた」「できなかった」の区別がつきやすく、学生の意識がそこに集中しやすくなる。次に多かった「教材研究」でも「レパートリーを増やす」「バリエーションを拡げる」等の記述が目立ち、子どもの前に立った時に、直ぐに役に立つ技術や知識を求めていることが分かる。保育の勉強を始めて1年3ヶ月程の学生には無理も無いことだろう。しかし技術はもちろん大切な要素ではあるが、実際に保育を行うためには、一人ひとりの子どもの興味、関心を観察し、その時、その場の子どもの姿をどうとらえ、理解するかが重要である。授業に於いては、技術面だけでなく、学生が常に子どもの姿をイメージしながら取り組める内容を、さらに盛り込む必要があり、その重要性を伝えていかななくてはならない。

V. おわりに

今回実施した調査項目(1)~(4)の集計結果の報告と項目別の考察を行ってきた結果、全ての調査項目にわたって学生自身の音楽の知識と演奏技術習得に関する記述、及び保育現場における音楽表現活動の実践力に関する記述がみられるということが明らかになった。そこで、さらにこの点について考察を進めてみたい。

学生たちの記述内容を見ると、実習開始前の段階だけでなく実習後の振り返りの段階においても、手遊びや幼児曲のレパートリーを増やしていく必要性を強く感じていることが窺える。実習中、学生たちは様々な発達段階の子どもたちと直接的に係わり合い、現場保育者の実践に触れ、また音楽活動における子どもの姿を目の当たりに観察する機会を得たことによって、多くのことを学んできている。現場で様々な体験を積み機会を得ることができたからこそ、彼らは現場保育者と自分を比較し、自分には何が不足しているのか、どのような点を改善していくべきなのかといった自己の保育実践力について考えることができたといえよう。個々の学生は実習の振り返り作業を行いながら自己評価をすることによって、今後、さらに習得すべき具体的な学習目標を立てている。各自が取り組むべき目標を明確化できたことによって、次なるステップへと進むための学習意欲の高まりを生んでいる。

学生たちの多くは、教材として活用する曲のレパートリー拡大を図ることの必要性に目を向けていた。我々、音楽担当教員は、本学で開講されている音楽関連科目群の授業の中で、学生たちのレパートリー曲を増やしてい

くことができるような指導を心掛けているが、今後はこれまで以上に複数の教員間の連携を図り、学生の要望に対して充分に応え得るよう、一層の努力を重ねていきたい。

演奏技術の習得に関しては、多くの学生がピアノに注目しており、「ピアノの演奏技術を高めたい」といった彼らの思いを綴っていた。一般的に、保育者養成校に入学してくる学生のピアノの経験には大きな個人差がみられるということが指摘されている¹¹⁾。

幼児期から短大入学時までの長期にわたって継続的にレッスンを受け続けてきた学生たちがいる一方で、養成校に入学してから初めてレッスンを受けることになったという学生たちも多い。本学の学生にも同様の状況が見られる。我々音楽担当教員は、経験者の学生の音楽的表現力を育成していくだけでなく、2年間という短期間の中で初心者の学生たちが保育現場で必要となる演奏技術を身につけることができるよう指導していくことも求められる。

保育者養成校の音楽担当教員による先行研究のテーマには、初心者の学生のレッスン方法や簡易伴奏法等、ピアノに関する研究が数多く見受けられる¹²⁾。つまり、本学に限らず他校においても、初心者学生のピアノの習得に苦慮しているという現状を抱えているということが窺える。保育現場で歌唱活動や楽器活動等の音楽活動を実践する際、もちろん、ピアノで伴奏をする場面も多々あるが、必ずしも保育者はピアノを多用しているというわけではない。ピアノを用いずに音楽活動を実践する場面はいくらでもある。しかし、ピアノに対して苦手意識が強い初心者の学生ほど、いざ保育室内の子どもとピアノを前にすると、「弾かなければならない」との思いに囚われがちであり、実習後のレッスン時にもピアノの力量不足に関する発言が聞かれた。

学生にとって実習は、自分の力量を知り、自らが取り組むべき実習後の学習課題の明確化を図る上で貴重な機会となっている。とかく学生は、曲を知っているか否か、ピアノが弾けるか否かというように、「できる」「できない」といった二極化した捉えかたをする傾向が見られるが、保育現場での音楽活動は、ただ単に多くの幼児曲を知っているだけで対応できるものではないし、幼児曲の伴奏といったピアノの演奏技術等を身につけるだけで対応できるものでもない。

音楽を媒介として子どもと向き合い、子どもの表現を受け止め、自らも表現し、互いに交流し合うことのできるような係わりこそが、保育者養成校の学生が身につけるべき音楽表現活動の実践力だといえよう。したがって、学生たちはそのような視点を持って学習することの重要性を十分に理解したうえで、保育者に求められる音楽に関する知識や演奏技術の習得を目指す必要がある。

保育現場での音楽表現活動体験の少ない学生たちが、子どもの育ちへの理解と保育現場における音楽活動の目的とねらいへの理解を深めるためには、日頃の授業の中で保育現場における具体的事例の提示が不可欠であると思う。

今回、アンケート調査結果を整理したことによって、これまで以上に日頃の授業内容の中に現場での音楽活動との接点を示すことを配慮しながら授業を進めていかなければならないという思いを強くしている。

VI. 参考文献

1. 上谷裕子、他：保育者養成課程における初心者の器楽基礎について、全国大学音楽教育学会研究紀要、第18号、2007.
2. 保育者養成校における初心者のためのピアノの学習方法に関する先行研究には、以下のようなものがある。
 - ・村上玲子：子供の歌の伴奏楽器に関する一考察、全国大学音楽教育学会研究紀要、第5号、1994.
 - ・高御堂愛子：保育者養成における音楽教育の原点を探る、全国大学音楽教育学会研究紀要、第6号、1995.
 - ・川村範子：幼児教育における表現活動としてのピアノ演奏の指導法—國學院短期大学での実践報告と考察—、全国大学音楽教育学会研究紀要、第15号、2004.
 - ・三瓶令子：保育におけるピアノ伴奏に関する再考察—身体的対話性の視点から—、全国大学音楽教育学会研究紀要、第17号、2006.
 - ・駒久美子：保育者養成における音楽的な自己表現と構造的聴取の重要性—授業における創造的な音楽活動の観察と分析を通して—、全国大学音楽教育学会研究紀要、第18号、2007.
3. 小西由利子、精葉子：教育実習を通しての学生の学び・育ち—音楽表現に関する視点から—、全国大学音楽教育学会研究紀要、第18号、2007.